

現代チベット語（中央方言）における複合形容詞の研究  
——その修飾構造と内部構造についての考察——

高橋慶治  
(京都大学大学院)

A Study of the Composite Adjectives in Modern Tibetan  
(Central Dialect)  
—An analysis of their modifying and internal structures—

TAKAHASHI, Yoshiharu  
Graduate School, Kyoto University

In this paper, I try to examine the structures of the composite adjectives in the Central Dialect of Modern Tibetan. As a conclusion, I propose that the structures of the composite adjectives are as follows:

- (a)  $[_{NP}N [_{AP}[VP] Adj]]$
- (a')  $[_{NP}[_{AP}[VP] Adj] CM(=GI) N]$
- (b)  $[[VP] Adj]$

(a) shows that N is modified by the composite adjective following it. (a') is the premodifying version of (a) with the GI Case Marker. (b) shows that the whole VP joins to the Adj and the AP doesn't modify a specific noun.

1. Modifying structures of composite adjectives

In Tibetan, adjectives usually follow the nouns which they modify.

Simple adjectives normally cannot precede the noun, not even with the GI Case Marker. The phrase which is accompanied by the GI Case Marker becomes a nominal. So adjectives also have to become nominals. We find it difficult for simple adjectives to become nominals because they're not allowed to be accompanied by the GI Case Marker.

Composite adjectives also follow the nouns to be modified, but sometimes precede them with the GI Case Marker. Composite adjectives are in principle allowed not only to follow the nouns which they modify but also to precede them with the GI Case Marker accompanying them.

If the modified noun is a proper noun, however, composite adjectives aren't allowed to follow the noun but have to precede it with the GI Case Marker.

So we assume that the composite adjective following the noun is in the attributive use and that preceding the noun is in the non-attributive use.

## 2. Lack of case marker

In the attributive use, the modified nouns lose their case marker.

- (a) The noun with a case marker is included in the VP which joins to the adjective.

[<sub>VP</sub>[<sub>NP</sub> N CM] V] Adj]

- (b) The noun without a case marker is not included in the VP which joins to the adjective and is modified by the composite adjective attributively.

[<sub>NP</sub> N][<sub>AP</sub>[<sub>VP</sub> NP V] Adj]

ʼtepo has both the structure of (a) and that of (b).

ʼkhääpo has the structure of (b) only.

In the structure of (b), the NP is raised from the VP, which joins to the Adj, to the place of subject of the upper structure which is an adjective predicate.

## 3. Nominalizer -yaa

-yaa is a marker of the sentential nominal, so the VP followed by -yaa has the structure of a sentence. So the nominal clause of the VP followed by -yaa includes complete NP's which are accompanied by case markers.

When the noun is not allowed to be followed by a case marker, it has been raised from the VP, in which it was included, to the place of subject of the upper structure which is an adjective predicate.

The VP part of the composite adjective is also nominalized, but the degree of nominalization by -yaa is higher than that of a composite adjective.

はじめに

1. 修飾の位置：前置 vs. 後置
2. 格助詞の使用と不使用
3. 名詞化接辞 -yaa の挿入による名詞節化

おわりに

- 略号  
謝辞  
参考文献

## はじめに

本稿は、現代チベット語における「動詞＋形容詞」という構造を持つ形容詞句を分析しようとするものである。この構造は、その構成からわかるように、動詞的な性格と形容詞的な性格をあわせ持つ。この種の形容詞句は、“composite adjective” (Kitamura [1977 : 20]) とか、「複合形容詞」(星 [1988 : 51]) という名称で呼ばれるが、実際には、ほとんど記述されていない。高橋 (1990) において、筆者は、複合形容詞 (動詞複合型) のうち、

形容詞部分が ʼtepo であるものと ʼlapo であるものについてその違いをデータから明確化しようとした。また、高橋 (1991) では、複合形容詞 (動詞複合型) の構造について記述的研究を目指した。本稿では、複合形容詞の構造上の性格について考察を深める。

現代チベット語におけるこのような構造の形容詞句には、動詞複合型と名詞複合型の二種がある。本稿では、前者のみを扱う。次の a, b が動詞複合型, c が名詞複合型である。

- (1)
- a. ʔkhalaa ʔti ʔsa ʔtepo ʔree  
食物 これ 食べる 良好な AVI  
・この食べ物はいちやす
- b. ʔkhong ʔkhalaa ʔso ʔkhääpo ʔree  
彼 食事 作る 上手な AVI  
・彼は食事を作るのが上手です
- c. ʔsonam ʔlakpa ʔtepo ʔree  
〈人名〉 手 良好な AVI  
・彼は器用である

上の例では、複合形容詞が叙述文の中に含まれて形容詞文を形成しているが、むしろ、単純形容詞と同様、限定的に修飾することもある。

第1章では、名詞に後置される単純形容詞と異なり、複合形容詞（動詞複合型）は前置も可能である点について見る。固有名詞に対する修飾の位置の差異から、チベット語における形容詞の修飾構造が、前置と後置とでは若干異なることがわかる。第2章では被修飾名詞が格助詞を伴う場合、複合している動詞句内にあることを明らかにする。第3章では名詞化接辞 *-yaa* を付加した場合について見ていく。後半の二章では、名詞化 *nominalization* について若干言及する。

### 1. 修飾の位置：前置 vs. 後置

本章では、複合形容詞が限定的に用いられる場合の、名詞に対する位置について考えてみる。

1.1 最初に、若干の単純形容詞と名詞複合型複合形容詞の例を見ておく。

チベット語では、形容詞は被修飾名詞に後置されるのが普通である。形容詞が前置され

る場合は、必ずGI格助詞が用いられる<sup>1)</sup>。GI格助詞に前置された語は、名詞化ないし名詞句化されている。しかし、単純形容詞は品詞転換されにくい。

- (2)
- ʔnampu ʔchungcun 「小さい絨毯」：  
\*ʔchungcun gi ʔnampu  
ʔnampu ʔkaapo 「白い絨毯」：  
?ʔkaapöö ʔnampu

武内（1990）によれば、ʔchungcun 「小さい」と ʔkaapo 「白い」では形容詞の性格が異なり、それが適格度の違いに関わっていると考えられる。すなわち、「絶対形容詞」（武内[1990:9f]）の方がより名詞化されやすいため、GI格助詞に先行しやすと考えられる。しかし、ʔkaapo を前置したものは、むしろ「白人」といような名詞に解釈されることがあり、単純な修飾関係と解されない<sup>2)</sup>。

次は、名詞複合型の複合形容詞の例である。

- (3)
- ʔtrhonkyee ʔchenpo 「大きい都市」：  
\*ʔchenpöö ʔtrhonkyee  
ʔtrhonkyee ʔkya ʔchenpo 「広い都市」：  
ʔkya ʔchenpöö ʔtrhonkyee  
ʔnampu ʔpüü ʔthakpo 「質の良い絨毯」：  
ʔpüü ʔthakpöö ʔnampu

単純形容詞より複合形容詞（名詞複合型）の方が前置を容認されやすい<sup>3)</sup>。これは、語のレベルの品詞転換より句のレベルの品詞転換の方が容易であることを示している。N+Adj という構造を持つ複合形容詞は、チベッ

1) 本文の例では、例えば、ʔkaapo 「白い」に対して、ʔkaapöö という語末の音の変化によって、GI格助詞が表される。GI格助詞がなければ、文法的に不適格である。

2) 例えば、GI格助詞によって所有関係を先に意識してしまう例がある。

ʔnampu ʔmaapo 「赤い絨毯」： ʔmaapöiö ʔnampu 「共産主義者の絨毯」

この例は、単純形容詞が、むしろまったく異なった意味の名詞になることを示す。

3) 名詞複合型の複合形容詞にも前置すると適格性の下がるものもあるが、その適格性の低下について本稿では考察しない。

ト語の句構造形式から言えば、Nを主要部とするNPと同じ構造であり、構造上の曖昧さがある。従って、複合形容詞は単純形容詞に比べ名詞句化しやすく、GI格助詞の前にあるとき、後続する名詞を同格的に修飾していると考えられる。形容詞としては、名詞に後続する場合に限定的な修飾構造を持っていることになる。

1.2 さて、複合形容詞動詞複合型（以下、単に複合形容詞とする）は、一般に、名詞に対し、前置することも後置することも可能である。名詞複合型の場合と同様、句の主要部が前置されるチベット語本来の性格から言って、複合形容詞で、句末の形容詞が主要部の役割を果すのは不自然である。従って、構造上の曖昧さが生じ、品詞転換、すなわち名詞化が起こりやすいと考えられる。

(4)～(9)は、複合形容詞の前置、後置をもに許す例である。(4)(5)は、食べる対象に対する限定的な修飾である。

(4)

- a. ˈkhalaa ˈsa ˈtepo ˈcii ˈsoroo nan  
食事 食べる 良好な 一 作る-〈依頼〉  
・食べやすい食事を作ってください
- b. ˈsa ˈtepöö ˈkhalaa ˈsoroo nan  
食べる 良好な-GI 食事 作る-〈依頼〉  
・(同上)

(5)

- a. ˈsonam ki ˈkhalaa ˈsa ˈtepo ˈcii  
〈人名〉 GIS 食事 食べる 容易な 一  
ˈnanroo nan  
与える(h)-〈依頼〉  
・ソナムが食べやすい食事をください
- b. ˈsonam ki ˈsa ˈtepöö ˈkhalaa  
〈人名〉 GIS 食べる 容易な-GI 食事  
ˈnanroo nan  
与える(h)-〈依頼〉  
・(同上)

(6)は、送ろうとしている手紙に対する限定的修飾である。この手紙をソナムが読んでもかまわない、問題は起こらないということを表している。

(6)

- a. ˈsonam la ˈyiki ˈtan ˈtepo ˈcii ˈtrhii·  
〈人名〉 LA 手紙 送る 良好な 一 書く-  
pa ˈyin  
AVI  
・(私は)ソナムに出しやすい手紙を書いた
- b. ˈsonam la ˈtan ˈtepöö ˈyiki ˈtrhii·  
〈人名〉 LA 送る 良好な-GI 手紙 書く-  
pa ˈyin  
AVI  
・(同上)

以上は、複合している他動詞の目的語に対する修飾である。

(7)(8)は、他動詞の目的語を修飾しているのではない。(7)のˈtrhönpa「井戸」は、(20)でも取り上げるが、NAS格助詞を含むものであって、水の出所を表している。ここでは、ˈchu ˈlen ˈlapo「水を取りやすい」という部分がˈtrhönpa「井戸」を修飾している。

(7)

- a. ˈtrhönpa ˈchu ˈlen ˈlapo ˈcii la  
井戸 水 取る 容易な 一 LA  
ˈtrhiiroo nan  
連れて行く-〈依頼〉  
・水を取りやすい井戸に連れて行ってください
- b. ˈchu ˈlen ˈlapöö ˈtrhönpa la  
水 取る 容易な-GI 井戸 LA  
ˈtrhiiroo nan  
連れて行く-〈依頼〉  
・(同上)

(8)は、自動詞´tro「行く」を用いた例である。

(8)

a. ʼlamkaa ʼshikatse la ʼtro ʼtepo ʼcii  
道 <地名> LA 行く 良好な 一

ʼtänroo nan

示す-<依頼>

・シガツェに行きやすい道を教えてください

b. ʼshikatse la ʼtro ʼtepöö ʼlamkaa  
<地名> LA 行く 良好な-GI 道

ʼtänroo nan

示す-<依頼>

・(同上)

このような通路を表す ʼlamkaa 「道」には、通常 NAS 格助詞が用いられる<sup>4)</sup>。少なくとも形式的には、(8)についても起点を表す名詞句を修飾していることになる。これらの例からわかるように、ʼtepo によって構成される複合形容詞は、複合した動詞句内の要素を修飾するわけだが、それは絶対格名詞に限らない。

ʼkhääpo 「上手な」は人の能力についての叙述なので、その修飾する名詞は必ず人を表す。

(9)

a. ʼmi ʼkhalaa ʼso ʼkhääpo ci ʼngää ʼnan  
人 食事 作る 上手な 一 私-GI 家  
la ʼtrhii shoo  
LA 連れて行く IMP  
・食事を作るのが上手な人を私の家に連れてきなさい

b. ʼkhalaa ʼso ʼkhääpöö ʼmi ci ʼngää  
食事 作る 上手な-GI 人 一 私-GI  
ʼnan la ʼtrhii shoo  
家 LA 連れて行く IMP  
・(同上)

この場合、注意すべきことは、ʼkhalaa ʼso ʼkhääpo だけで「料理の上手な人」という意味になりうることである。

(10)

ʼkhalaa ʼso ʼkhääpo ʼsu ʼräa  
食事 作る 上手な 誰 AVI(QM)  
・料理が上手な人は誰ですか

これは、複合形容詞の名詞への品詞転換が容易であることを示唆するものである<sup>5)</sup>。

1.3 以下では、前置と後置との間の適格性の差がある例を見る。結論から言えば、ここでの前置もしくは後置による適格性の低下は、原則として複合形容詞の本来的な性格によるものではない。

(11)は、a が形容詞文、b が名詞文<sup>6)</sup>であると言うことができる。基本的には、a が好まれるのであって、b の構造の文を使うことは少ない。(12b)では、同様の構造であるが、適格性が下がる。

(11)

a. ʼsonam ʼkhalaa ʼso ʼkhääpo ʼree  
<人名>-ø 食事 作る 上手な AVI  
・ソナムは食事を作るのが上手だ  
b. ʼsonam ʼkhalaa ʼso ʼkhääpöö ʼmi ʼree  
<人名>-ø 食事 作る 上手な-GI 人 AVI  
・ソナムは食事を作るのが上手な人だ

4) 次のようになる。

ʼlamkaa ʼti nää ʼshikatse la ʼtroki ʼree

・この道を(通って)シガツェへ行く

5) (9b)の複合形容詞が、「料理の上手な人の所有する人」という解釈で名詞的に用いられないのは、単に、談話的な可能性の問題であろう。文脈次第では、そのような解釈を可とするように思われる。

6) ここで、形容詞文とは武内(1990)の「形容詞述部構文」であり、名詞文とは「名詞述部構文」である。以下、単に形容詞文、名詞文と呼ぶ。

(12)

- a. ʔsonam ʔmi la ʔtreewa ʔche ʔtepo ʔree  
 <人名> 人 LA 関係 VBL 良好な AVI  
 ・ソナムは人と仲良くなりやすい
- b. ʔsonam ʔmi la ʔtreewa ʔche ʔtepöo  
 <人名> 人 LA 関係 VBL 良好な-GI  
 ʔmi ʔree  
 人 AVI

(12b)で適格性が低くなるのは、名詞文になると ʔmi「人」が二度現われるので、全体の意味が把握しにくくなるからであろう。

(13)では、aが形容詞文、b、cが名詞文である。bが不適格になり、cで若干適格性が上がる程度である。bでは、ʔti「これ」と ʔthep「本」の語順が逆になっているという判断がさきに立つので不適格になるのに対し、cでは、この点がやや改善されるので適格性が上がる。

(13)

- a. ʔthep ʔti ʔloo ʔtepo ʔree  
 本 これ 読む 良好な AVI  
 ・この本は読みやすい
- b. \*ʔti ʔthep ʔloo ʔtepo ʔree  
 これ 本 読む 良好な AVI
- c. \*ʔʔti ʔloo ʔtepöo ʔthep ʔree  
 これ 読む 良好な-GI 本 AVI

この点から、複合形容詞の場合、より同格的で、名詞に対する修飾関係が弱いため、文全体の語順の影響を受けやすいと考えることができる。

(14a)は、複合形容詞を後置すると適格性が下がる例である。この例は、複合形容詞を後置できないと考える例証にはならないと思われる。むしろ、他の要因、例えば、cが許

容されないのと同様に GIS 格名詞の存在によって容認しにくくなっているとも考えられる。

(14)

- a. ʔkyheran ki ʔkhalaa ʔso ʔtepo ci  
 あなた GIS 食物 作る 良好な -  
 ʔsoroo nan<sup>7)</sup>  
 作る-<依頼>
- b. ʔkyheran ki ʔso ʔtepöo ʔkhalaa ci  
 あなた GIS 作る 良好な-GI 食物 -  
 ʔsoroo nan  
 作る-<依頼>  
 ・あなたが作りやすい食べ物を作って  
 ください
- c. \*ʔsonam ki ʔkhalaa ʔso ʔtepo ʔree  
 <人名> GIS 食事 作る 良好な AVI

ただし、(5)で見たように、GIS 格助詞があっても可能なことがあるので、動詞の差である可能性も考慮にいれなければならない。

(15a)が「料理人が作るのが上手な食事」という意味には解釈されずに不適格であるのは、修飾する対象が ʔkhalaa「食事」という人を表さない名詞だからである。また、「作るのが上手な料理人」という修飾が可能なのではないかとも思われるが、それも許されない。それは、一つには、何を作るのかが示されていないことと、そのため「料理人」が「作る」の目的語に解されるからであろう<sup>8)</sup>。

(15)

- a. \*ʔmacän ʔso ʔkhäapöo ʔkhalaa ʔmomoo  
 料理人 作る 上手な-GI 食事 モモ  
 ʔree  
 AVI

7) なお、ʔkyheran kiを「あなたの」というように GI 格に解する場合は可である。

8) ここで、ʔmacänに GIS 格助詞を付加して、ʔsoの行為者であることを明示することは、次章で見るように、ʔkhäapoを使った構文では不可である。

- b. ˈkhalaa ˈso ˈkhäapöö ˈmi ˈsu ˈrää  
 食事 作る 上手な-GI 人 誰 AVI(QM)  
 ・ 食事を作るのが上手な人は誰ですか

前置もしくは後置が許容されない例をいくつか見たが、それらの中に、許容されない原因が複合形容詞の性格によると思われるような例はなかった。複合形容詞は、原則的には前置及び後置をとともに許すと考えてよい。

ところが、固有名詞と一般名詞とでは、修飾のされ方に違いがあるので注意を要する。次の例を見られたい。

(16)

- a. ˈphomo / \*ˈsonam ˈkhalaa ˈso ˈkhäapo  
 少女/<人名> 食事 作る 上手な  
 ˈthi la ˈti ˈnanroo nan  
 それ LA これ 与える-<依頼>

・ 食事を作るのが上手なその少女 / \*ソナムにこれをあげてください

- b. ˈkhalaa ˈso ˈkhäapöö ˈphomo ˈthi  
 食事 作る 上手な-GI 少女 それ  
 /ˈsonam la ˈti ˈnanroo nan  
 /<人名> LA これ 与える-<依頼>

・ 食事を作るのが上手なその少女 / ソナムにこれをあげてください

(17)

- a. ˈama / ? ˈtrashii ˈtrum ˈshöö ˈkhäapo  
 母親/<人名> 物語 話す 上手な  
 ˈkhapaa ˈtööki ˈyoo ˈree

どこに 住む -AVE

・ 物語をするのが上手な母親 / \*タシはどこに住んでいますか

- b. ˈtrum ˈshöö ˈkhäapöö ˈama / ˈtrashii  
 物語 話す 上手な-GI 母親/<人名>

ˈkhapaa ˈtööki ˈyoo ˈree  
 どこに 住む -AVE

・ 物語をするのが上手な母親 / タシはどこに住んでいますか

(18)

- a. ˈnga ˈtrhonyee / \*ˈhlaasa ˈtöö ˈtepo  
 私 都市/ラサ 住む 良好な  
 la ˈtroki ˈyin  
 LA 行く -AVI

・ 私は住みやすい都市 / \*ラサに行く

- b. ˈnga ˈtöö ˈtepöö ˈtrhonyee / ˈhlaasa  
 私 住む 良好な -GI 都市/ラサ  
 la ˈtroki ˈyin  
 LA 行く -AVI

・ 私は住みやすい都市 / ラサに行く

(16a)のように指示詞 *ˈthi* が入っている場合には、*ˈsonam* でも適格性が若干増すのだが、それが常にそうなるのではなく、*ˈthi* 自体が好まれないこともある。いずれにしても、固有名詞に対しては、複合形容詞は後置できないと言えるだろう。これは、形容詞の後方からの修飾と前方からの修飾が機能的に異なっていることを表している。チベット語では後方から修飾する構造が無標であり、名詞を限定的に修飾する。このため、固有名詞を後方から修飾することができない<sup>9)</sup>。

以上見てきたことから、ここで考えられる複合形容詞の修飾構造は次のようなものである。

9) ただし、複合形容詞名詞複合型では異なっている。

- (a) ˈsonam ˈlakpa ˈtepo (ˈthi) ˈtää ˈtrhiroo nan  
 <人名> 器用な (それ) ここへ 導く-<依頼>

・ 器用なソナムをここに連れてきてください

- (b) ? ˈlakpa ˈtepöö ˈsonam ˈtää ˈtrhiroo nan  
 器用な -GI <人名> ここへ 導く-<依頼>

この点は、まだ調査が十分ではない。

(19)

- a. N+ [VP Adj]  
 b. [[VP Adj] CM(=GI)] + N

複合形容詞は、原則的には前置も後置も可能である。前置されたり後置されたりしている複合形容詞は、ある対象を限定的に修飾しているという点で、状況の良好さを叙述するものとはならない。

ただし、修飾語が固有名詞の場合は、明らかに複合形容詞を後置することができない。固有名詞に対する限定修飾が通常好まれない点を考慮すると、チベット語のこの現象は、チベット語において名詞に後置される形容詞が名詞に対して限定修飾であることを示唆する。そして、GI 格助詞を介して名詞に前置される形容詞は、名詞に、同格的に非限定修飾をしていると見ることができる。

## 2. 格助詞の使用と不使用

本章では、名詞に後置された複合形容詞が限定修飾として用いられた場合、修飾されている名詞が格標示を失って、動詞句の外に出るという点について見る。

複合形容詞が修飾している名詞に対して、格助詞が用いられる場合、その名詞句は、形容詞と複合している動詞の動詞句内にあって、全体で形容詞と複合していると考えられる。それに対して、格助詞が用いられない場合は、名詞句は、実は動詞句の外にあって、V+Adj という構造から直接修飾を受けていると考えられる<sup>10)</sup>。

(20) は、NAS 格助詞を用いた例である。a は、行為の容易さを表しているのであって、構造上は、井戸についての叙述ではない。b は、NAS 格助詞を取らず、絶対格で表される。「水を汲みやすい」という部分が、trhönpa 「井戸」に対して限定的に修飾しているからである。

10) ただし、絶対格名詞に関しては、格助詞の不使用があるかどうかという判断ができないので、本章の観察は、格助詞が取りうる項に限られる。

(20)

- a. trhönpa 'ti nää 'chu 'len 'lapo 'ree  
 井戸 これ NAS 水 取る 容易な AVI  
 ・この井戸からは水を汲みやすい  
 b. trhönpa ø/ \*näa 'chu 'len 'lapo 'cii  
 井戸 ø/NAS 水 取る 容易な 一  
 la 'trhiiroo nan  
 LA 連れて行く<依頼>  
 ・水を汲みやすい井戸に連れて行って  
 ください

ただし、a では、näa がなくても、適格である。その場合は、井戸について叙述する形容詞文であると考えられる。(21) は、(20a) と同じタイプの例文である。

(21)

- trhönpa 'ti nää 'chu 'chu 'tepo  
 井戸 これ NAS 水 汲む 良好な  
 'män · tsan 'trhönpa 'shäntaa la 'troki  
 AVI(NEG)-CONJ 井戸 異なる LA 行く-<  
 'yin ・この井戸は水を汲みやすくないので  
 AVI ほかの井戸に行きます

ここでも、näa がなくても適格であり、その場合は、形容詞文として「井戸」の叙述をしていると言える。(20a) (21) は次の a、(20b) は次の b のような構造を持っていると考えられる。

(22)

- a. [[VP [-trhönpa 'ti nää] 'chu 'len]  
 'lapo] 'ree  
 b. [NP [-trhönpa ø] [AP 'chu 'len  
 'lapo] 'cii] la 'trhiiroo nan

(20a) や (21) が NAS 格助詞を取らなくても適格であるのは、b に近い構造を持っている、形容詞文を構成できるからである。



(23a)は、限定的に ˈkän·laa 「先生」を修飾している。bは、意味的には状況を叙述する文になっている。

(23)

- a. ˈkän·laa ˈkantri ˈshu ˈtepo cii  
先生 質問(h)言う(h) 良好な 一  
la ˈngotröö ˈnanroo nan  
LA 紹介 VBL-〈依頼〉

・質問しやすい先生に紹介してください

- b. ˈkän·laa ˈphaki la ˈkantri  
先生 あれ LA 質問(h)  
ˈshu ˈtepo ˈree  
言う(h) 良好な AVI

・あの先生には質問しやすい

この例においても、aとbのそれぞれの構造は次のようなものであると考えられる。

(24)

- a. [NP [N ˈkän·laa] [AP ˈkantri ˈshu ˈtepo] cii] la ˈngotröö ˈnanroo nan  
b. [[VP ˈkän·laa ˈphaki la ˈkantri ˈshu] ˈtepo] ˈree

(24b)の構造からわかるように、LA格助詞を取った名詞 ˈkän·laa は動詞句の内部にあって、その動詞句全体が ˈtepo と複合する。

次の場合、aでは、LA格助詞を取り、「私の父に対して食事を作ること」という sentential nominal を構成していると考えられる。そのため、状況の良好さを叙述していることになり、「私の父」自体についての叙述ではない。bでは、LA格助詞がないので、「私の父」は動詞句の外側に出ていると考えられる。

(25)

- a. ˈngää ˈpaa·laa la ˈkhalaa ˈso ˈtepo  
私-GI 父 LA 食事 作る 良好な  
ˈree  
AVI

・私の父には食事を作ってあげやすい

- b. \*ˈngää ˈpaa·laa ˈkhalaa ˈso ˈtepo ˈree  
私-GI 父-ø 食事 作る 良好な AVI

この例では、sentential nominal を構成しており、従って、aのように動詞句内に存在する名詞は、動詞の要求する格標識を取らねばならない。ˈtepo が構成する文では、埋め込まれた動詞句より上位の文に動詞句内の一つの名詞句を繰り上げることが可能であるが、繰り上げることのできる名詞句には制限がある<sup>11)</sup>。また、繰り上げが生じない場合は、動詞句全体が sentential nominal として形容詞と複合する。

(26) (27)は、ˈkhääpo 「～するのが上手な」という形容詞を使った例である。それぞれ、bに見られるように、GIS格助詞を用いると不適格になる。

(26)

- a. ˈkushoo ˈsonam·laa ˈmomoo ˈso  
氏 〈人名〉-ø モモ 作る  
ˈkhääpo ˈtuu  
上手な AVE

・ソナムさんはモモを作るのがうまい

- b. \*ˈkushoo ˈsonam·laa ki ˈmomoo ˈso  
氏 〈人名〉 GIS モモ 作る  
ˈkhääpo ˈtuu  
上手な AVE

(27)

- a. ˈsonam ˈpuku tan ˈtseemo ˈtse  
〈人名〉-ø 子供 DANG 遊び 遊ぶ  
ˈkhääpo ˈree  
上手な AVI

11) この制限がいかなるものであるかは、今後の課題である。

・ソナムは子供と遊ぶのが上手である

- b. \*sonam ki puku tan tseemo tse  
 <人名> GIS 子供 DANG 遊び 遊ぶ  
khääpo ree  
 上手な AVI

‘khääpo が構成する形容詞の文の構造を考えてみると、複合している動詞の行為者名詞は、GIS 格助詞を取らないという点から、動詞句の外側にあると考えられる。行為者名詞を含む動詞句が上位の形容詞文に埋め込まれ、その行為者名詞は形容詞文の主語の位置に繰り上げられる。そのとき、格助詞が義務的に削除される。

(28)

- [N<sup>-</sup>sonam] [AP[VP<sup>-</sup>sonam ki puku tan  
 tseemo tse] khääpo] ree

次の ‘kyiipo 「熱心な」についても、上の ‘khääpo と同様な構造が考えられる。

(29)

- a. sonam phökää lopcon che  
 <人名> チベット語 勉強 VBL  
 ‘kyiipo ree  
 熱心な AVI  
 ・ソナムはチベット語を勉強するのが熱心だ
- b. \*sonam ki phökää lopcon che  
 <人名> GIS チベット語 勉強 VBL  
 ‘kyiipo ree  
 熱心な AVI

‘khääpo と ‘kyiipo は同じ修飾構造を持っていて、被修飾名詞が動詞句内に取り込まれないので、GIS 格助詞を伴うことはない。このような構造を持っているため、状況を叙述することがないと考えることができる。

(30)

- [NP<sub>i</sub>] [AP[VP[NP<sub>i</sub> NP V] Adj] AV

(Adjは、‘khääpo または ‘kyiipo)

(31) は、順に、a が情況叙述、b と c は名詞文である。そのそれぞれの構造は、(32) のようになっていると考えられる。

(31)

- a. kyooto la töö tepo ree  
 京都 LA 住む 良好な AVI  
 ・京都は住みやすい
- b. kyooto rhonkyee töö tepo ree  
 京都 都市 住む 良好な AVI  
 ・京都は住みやすい都市です
- c. kyooto töö tepöö rhonkyee ree  
 京都 住む 良好な-GI 都市 AVI  
 ・京都は住みやすい都市です
- d. \*kyooto rhonkyee la töö tepo ree  
 京都 都市 LA 住む 良好な AVI

(32)

- a. [[VP kyooto la töö] tepo] ree  
 b. [NP kyooto] [NP [N rhonkyee]  
 [AP töö tepo]] ree  
 c. [NP kyooto] [NP [AP töö tepöö]  
 [N rhonkyee]] ree  
 d. \* [NP kyooto] [[VP rhonkyee la  
 töö] tepo] ree

a では、LA 格助詞が動詞句の内部にあって、動詞句全体が形容詞と複合したものである。b と c では、複合形容詞はその外側にある絶対格の名詞句を修飾しており、それが一つの名詞句を構成している。ところが、d では、名詞句が LA 格助詞の付加によって動詞句の内部に入り、複合形容詞を構成するので、ここは名詞句を構成することがない。この構造自体は、a の構造と同じであり、構造上完結しており、文頭に名詞句があることによって

非文となる。

以上の観察から考えられる複合形容詞の内部構造は、次のようなものであろう。

(33)

- a. [[<sub>VP</sub>N (CM) V] Adj]  
b. [N] [<sub>AP</sub>VP Adj]

a は、動詞句全体が形容詞と複合している場合であり、状況叙述の意味になる。b は、叙述の助動詞を伴えば形容詞文になり、形容詞句 (AP) に指示形容詞や数詞が後続すれば、AP は N を限定修飾し全体で名詞句を形成する。`tepo は、複合形容詞になる時、(33) の a と b 両方の構造を持つことができるが、`khääpo や `kyiipo は b の構造しかなく、従って、状況を叙述する意味は表せない。次章で見る名詞化接辞 -yaa は文単位の nominalization の標識である。複合形容詞では、その動詞部分が標識なく nominalization を起こしていると考えられる。

### 3. 名詞化接辞 -yaa の挿入による名詞節化

本章では、第 2 章の考察に続き、複合形容詞内部構造にさらに考察を加える。

名詞化接辞 -yaa は、動詞に付加して、その動詞を名詞化する。この時、動詞のみを慣用的な名詞句にすることもあるが、動詞が支配している部分を含めた動詞句全体を名詞節化して sentential nominal を作る場合もある。本章で扱っている現象は後者に属し、名詞節化することによって、動詞を形容詞から切り離し、複合形容詞とは異なった構造を構成する。

(34a) は、GIS 格助詞を取って不適格になっているが、b は、-yaa を付加して、`sonam から `so までの全体を名詞化し、その全体の状況が良好であるという意味の文に

なっている<sup>12)</sup>。

(34)

- a. \*`sonam ki `khalaa `so `tepo `ree  
    <人名> GIS 食事 作る 良好な AVI  
b. `sonam ki `khalaa `soyaa `tepo `ree  
    <人名>GIS 食事 作る-NML 良好な AVI  
    ・ソナムが食事を作りやすい

複合形容詞として複合している動詞句は名詞化していると考えられるが、-yaa を付加したほうが強力に動詞の含む項のすべてを名詞節の中に取り込む。

(35) も、-yaa をつけると全体が名詞節化するので、その節の中に名詞句 `lamkaa `ti 「この道」が取り込まれ、NAS 格助詞が必要となる。

(35)

- a. `lamkaa `ti `shikatse la `tro `tepo  
    道  これ <地名> LA 行く 良好な  
    `ree  
    AVI ・この道はシガツェに行きやすい  
b. \*`lamkaa `ti `shikatse la `troyaa  
    道  これ <地名> LA 行く-NML  
    `tepo `ree  
    良好な AVI  
c. `lamkaa `ti nää `shikatse la  
    道  これ NAS <地名> LA  
    `troyaa `tepo `ree  
    行く-NML 良好な AVI  
    ・(同上)

この例の構造は、次のようなものであると考えられる。

(36)

- a. [<sub>NP</sub>`lamkaa `ti ∅] [[<sub>VP</sub>`shikatse  
    la `tro] `tepo] `ree

12) 例文 (14b) の場合は、GIS 格助詞が動詞の直前にあるために容認されているように思われるが、今後も調査が必要である。

- b. \* [NP [VP ʔamkaa ʔti ø ʔshikatse  
la ʔtro]-yaa] ʔtepo ʔree  
c. [NP [VP ʔamkaa ʔti nää ʔshikatse  
la ʔtro]-yaa] ʔtepo ʔree

(36b)は、-yaaが動詞句に付加しているのに、aのようにNPが絶対格であるので、構造上不適格となることを示している。NAS格助詞を付加してやれば、cの構造となって適格になる。

ʔkhääpo「上手な」は、人に対する叙述であるので、ʔsonamが叙述の対象として絶対格で現れ、ʔkhääpoの補部がLA格助詞を取る。

(37)

- a. ʔkushoo ʔsonam ʔlaa ʔmomoo ʔso  
氏 <人名>-ø モモ 作る  
ʔkhääpo ʔtuu  
上手な AVE  
・ソナムさんはモモを作るのがうまい  
b. ʔsonam ʔmomoo ʔsoyaa la ʔkhääpo ʔree  
<人名>-ø モモ 作る-NML LA 上手な AVI  
・ソナムはモモを作るのがうまい

bで、ʔsonamがʔsoに対する行為者としてGIS格助詞を取ることはない。それは、ʔsonamが、-yaaが付加された動詞句より上位の形容詞文の主語の位置を繰り上げられたからである。GIS格助詞を取ると、-yaaによって形成された名詞節の中にʔsonamが残っていることになる。(38)も(37)と同様で、ʔkyiipo「熱心な」が人を表す形容詞であるので修飾の対象であるʔsonamは、GIS格助詞を取らない。

(38)

- a. ʔsonam ʔphökää ʔlopcon ʔcheyaa (la)  
<人名> チベット語 勉強 VBL-NML (LA)  
ʔkyiipo ʔree  
熱心な AVI

・ソナムはチベット語を勉強することに熱心だ

- b. \* ʔsonam ki ʔphökää ʔlopcon ʔcheyaa  
<人名> GIS チベット語 勉強 VBL-NML  
(la) ʔkyiipo ʔree  
(LA) 熱心な AVI

(38)の構造は、次のようなものである。(37)も同様の構造を持っていると考えられる。

(39)

- a. [NP ʔsonam] [NP [VP ʔphökää ʔlopcon  
ʔche]-yaa] (la) ʔkyiipo ʔree  
b. \* [NP [VP ʔsonam ki ʔphökää ʔlopcon  
ʔche]-yaa] (la) ʔkyiipo ʔree

この構造は、(28)で見たものと同じ性格を持つ。GIS格名詞は、埋め込まれた動詞句から上位の形容詞文の主語の位置に繰り上げられなければならない。

(40)では、aとbでLA格助詞を取る位置が異なっている。そのため、「この紙」という名詞句が複合形容詞の動詞部分に支配される[(40a)]か、それとも主節にあって形容詞の叙述を直接受ける[(40b)]かの違いが出ている。

(40)

- a. ʔshuku ʔtäa ʔyiki ʔtrhi ʔtepo ʔtuu  
紙 これ-LA 文字 書く 良好な AVE  
・この紙には文字を書きやすい  
b. ʔshuku ʔti ʔyiki ʔtrhiyaa la ʔtepo  
紙 これ 文字 書く-NML LA 良好な  
ʔtuu  
AVE ・この紙は文字を書くのに適当だ  
c. \* ʔshuku ʔtäa ʔyiki ʔtrhiyaa la  
紙 これ-LA 文字 書く-NML LA  
ʔtepo ʔtuu  
良好な AVE

(41)

- a. [[-shuku ʔää ʔiki ʔrhi] ʔepo] ʔtuu  
 b. [-shuku ʔi] [[ʔiki ʔrhi]-yaa] la  
           ʔepo ʔtuu  
 c. \* [[-shuku ʔää] ʔiki ʔrhi]-yaa] la  
           ʔepo ʔtuu

cでは、二ヶ所でLA格助詞を取っており、「この紙」という名詞句が動詞句内あるにも関わらず、「書くのに良好である」と叙述されている対象も別に存在するになってしまい、不適切である。

さて、最後に否定辞を付加した場合について見ておく。上での観察から、複合形容詞として複合した動詞句と-yaaが付加された構文は、ともに名詞節化していると思われる。しかし、この動詞に否定辞を付加することによって、両者に違いがあることがわかる。チベット語では、否定辞を動詞の前に置く。次の例に見られるように、複合形容詞に否定辞を直接付加することはできない。しかし、-yaaによって名詞節化してやると若干適格性が上がる。

(42)

- a. \* \* ʔsonam la ʔkhalaa ʔmiso ʔepo ʔree  
           <人名> LA 食事 NEG-作る 良好な AVI  
 b. \* ? ʔsonam la ʔkhalaa ʔmisoyaa  
           <人名> LA 食事 NEG-作る-NML  
           ʔepo ʔree  
           良好な AVI

(43)

- a. \* \* [[ʔsonam la ʔkhalaa ʔmiso]  
           ʔepo] ʔree  
 b. \* ? [[ʔsonam la ʔkhalaa ʔmiso]-yaa  
           ʔepo] ʔree

複合形容詞は、動詞と形容詞が直接的に結びついているので、動詞に結合する形で否定辞を置くことはできない。-yaaが付加され

ば動詞の形容詞からの独立性が高まるため、否定辞を付加しても適格性の低下が若干改善されるのだと思われる。この点から、複合形容詞は動詞と形容詞の結合力が強く、-yaaを挿入した場合の名詞節化とは異なっていることが明らかである。

### おわりに

本稿で、筆者は、現代チベット語の複合形容詞の修飾構造と内部構造について考えた。本稿での観察から、複合形容詞（動詞複合型）について次のような構造を考えておきたい。（Nは、APによって修飾される名詞である。）

- (a) [NP N [AP [VP] Adj]]  
 (a') [NP [[AP [VP] Adj] CM(=GI)] N]  
 (b) [[VP] Adj]

(a)の構造は、名詞と複合形容詞との間に修飾関係があって、(a')のように、GI格助詞を介することによって、複合形容詞を前置して、名詞を修飾できる。単純形容詞が、原則としてこのような修飾を許さないという点で、両者は異なっている。(b)の構造は、形容詞が動詞句全体と複合しているということである。この場合、複合形容詞というよりは、全体である状況を叙述する節になっており、名詞を修飾する機能はない。形容詞によって取る構造に差異があり、例えば、ʔkhääpo「上手な」は(a)の構造のみで用いられ、ʔepo「良好な」は(a)(b)の両方の可能性がある。(b)のVPは、その動詞が持ちうる項が文脈的に省略されない限り、その項のすべてを含む。(a)(a')では、VPの中の項の一つが複合形容詞から修飾を受けるべく、VPより上の構造に繰り上げられている。

### 謝辞

本稿は、高橋(1991)を大幅に改訂したものである。改訂に当たって、京都教育大学助

教授武内紹人先生から多大な御指導をいただいた。また、インフォーマントである大谷大学専任講師ツルティム・ケサン先生は、たいへんお忙しいなかをご教示くださった。ここに記して、両先生に感謝の意を捧げたい。

#### 略号

AVE 存在助動詞      LA    LA 格助詞

AVI	叙述助動詞	NAS	NAS 格助詞
CM	格助詞	NEG	否定辞
CONJ	接続詞	NML	名詞化接辞
DANG	DANG 格助詞	PL	複数接辞
GI	GI 格助詞	QM	疑問標識
GIS	GIS 格助詞	VBL	動詞化詞
(h)	敬語形	Vstem	動詞語幹
IMP	命令形		

#### 参考文献

- 星実千代. 1988. 『現代チベット語文法 (ラサ方言)』東京. ユネスコ東アジア文化研究センター.
- Kitamura, Hajime, 1977. *Tibetan (Lhasa Dialect)*. Asian & African Grammatical Manual No. 12z. Tokyo. ILCAA.
- 高橋慶治. 1990. 「現代チベット語における複合形容詞動詞複合型に関する一考察—特に 'tepo と 'lapo の比較を中心に—」1989年度京都大学大学院研究報告.
- . 1991. 「現代チベット語における複合形容詞 (動詞複合型) の記述的研究」1990年度京都大学大学院研究報告.
- 武内紹人. 1990. 「チベット語の述部における助動詞の機能とその発達過程」: 崎山理・佐藤昭裕代表編集『アジアの諸言語と一般言語学』西田龍雄教授環暦記念論文集. 東京. 三省堂. pp.6-16.